

〈特集〉 保育者養成

今、保育者養成で求められていくと

小川 清実

三、四年前から、日本では保育者養成（特に保育士養成）を始める短大や大学が増えました。急増したといってもいいくらいにどんどん増え、現在では、日本中で四百校以上の学校が保育士養成をしています。この傾向はまだまだ続く様子です。特にこれまで幼児教育や保育に無関係だった四年制大学も

保育者養成を始めています。近い将来、大学全入時代がやってくるというこの時に、なぜこのような事象が起こっているのでしょうか？ その理由は、都会を中心に保育所が不足しているという現実があります。いくら少子化で子どもの数が減少しても、保育所に入所できない、いわゆる待機児童が増加して

いるために、保育士はまだまだ必要であるという現実を受けて、保育士養成を始める大学などが増加しているといえます。何よりも大学側にとって都合がよいのは、保育士養成をする学科は、定員を割らないという状況があり、これらの理由で続々と保育士養成校が誕生していると考えられます。

求められる保育者とは？

乳幼児の保育を担う保育者の役割の基本は、時代とともに変化するものではないと考えています。いつの時代でも子どもにとって大切な保育の基本は、保育所保育指針に述べられている「乳幼児の最善の利益」を考慮していくことです。その方法は、幼稚園教育要領に述べられている「環境を通して」「遊びを通して」「一人ひとりの発達の特性に応じた」保育活動を行っていくことです。この基本は変わるものではありません。

変わったのは、子どもの親の状況です。現在、少子化ですが、保育所に入れないで待っている待機児童が多くいます。たとえば横浜市では、平成十七年の待機児童をなくすために、保育所の定員を増加したり、新たに保育所をつくったりして、定員分を用意しました。それにもかかわらず、翌年には、またほとんど同数の待機児童がいるという状況になっています。待機児童のほとんどは零歳児です。すなわち、子どもをもった多くの親は、育児休暇を一年間取るか取らないかで、仕事に復帰するようになったのです。

保育士養成においても乳児保育の重要さが認識され、通年の必修科目に指定されています。年齢が低くなればなるだけ、一人ひとりの子どもに応じた保育が要求されますから、保育者には高い専門性が必要になっていきます。

また、政府は少子化対策として「子育て支援」と

名づけたさまざまな事業を行うようになりました。

これで家庭にいる親に対して、地域の保育所、幼稚園、子育て支援センターなどが「子育て支援」をしていかなければならない状況になりました。そのために、現在の保育者にさらに要求されるのは、現代の社会における親と子の関係についての実態の把握と、その親子に対する援助です。保育所や幼稚園にいる、特定のよく知っている親子だけではなく、初めて出会った、よく知らない親子の保育も担わなければならぬのです。

保育者養成に求められていること

以前は、厚生省が出したソースブックにしたがって立てた教育課程を学習していけば、卒業時には保育者として巣立っていくことができる人がほとんどでした。まだ、社会に労働を通じてかかわりがあったり、共同作業を通して知り合ったりする人間的な

つながりが残っていた時代のことです。

ところが今から二十五年くらい前から、そうではなくなっていくたのです。その始まりは、実習先から、実習生である学生へのクレームという形で現れました。「掃除ができない」「箒の使い方を知らない」「雑巾が絞れない」「挨拶ができない」というようなクレームが、たびたび養成校の担当者を悩ませるようになったのです。

つまり、家事や育児などを生活の中で手伝わなくても済む学生の出現とともに、保育実習や幼稚園教育実習に参加する学生の日常的な生活力の不足が露見したのでした。保育という営みは、子どもの発達や保育内容などの専門科目を学習しなければならぬのももちろんですが、それ以前に保育者自身の生活力が必要条件であることが改めて認識されたのです。この人間としての生活力には次の要素が考えられます。

1 保育者は、自立した生活者であること。自立した生活者とは、他者の援助なしに自らの生活をしていくことができる人のことをいう。衣食住を自己管理できる人のことである。

2 保育者は、他者とコミュニケーションをとることができること。人間関係の中で保育は行われるので、他者とのコミュニケーションは基本である。言葉が話すことができない乳幼児や、コミュニケーションをとることが困難な相手ともコミュニケーションしようとする力が大切である。

これらの基本の上に、現在の保育を取り巻く事情から生じた、新たに保育者に課せられた課題は次のことであると考えられます。

3 保育者は、現代の大人の生活から減少し、消失してしまった「生きる」ためのさまざまな手や体

をつかった活動（栽培、飼育など）が実際にできること。消費生活しか知らない子どもに、育てる過程とともに過ごす人であることが非常に重要である。

4 保育者は、異文化理解ができ、実際にかかわっていく力があること。外国から多くの人が地域に住み、生活している。また、日本からも外国に住み、異文化の中で育った子どもが再び日本で生活を始めている。異文化をもつ人々とかかわることは、今や日常になった。異文化を理解し、かわっていくことができ

る保育者とともにいる子どもは、生活の中で自然とお互いを尊重しあう人間に育っていくと思う。

5 保育者は、地域の親



子の「子育て支援」をする力があること。日常、かかわっている親子だけではなく、地域に住む、初めてかわかる親子を支えることは、とても難しい。まだ地域の子育て支援の方法は確立していない。地域に住む親子の求めている支援が何なのかを理解して、実際にかかわっていく必要がある。子どもの保育を肩代わりするのではなく、親が安心して子どもの保育（子育て）ができるような支援が何であるのか、熟慮しながら実践できる人が求められている。

そこで、以上の保育者に必要なさまざまな力をどのようにに保育者養成校で具現化するのかということになります。国で定められた教育課程で養成するだけでは保育者に必要な力が育つことが難しいという現実を、保育現場も保育者養成をしている担当者たちも十分に知っているからです。

理論と実践をつなぐ教育の工夫

教育課程で学習したことが実践で発揮できるといふこと、すなわち理論と実践をつなぐことを可能にする仕掛けが必要です。本来、それは保育実習や幼稚園教育実習です。もし、それらの実習が現在の期間より長ければ、可能かもしれません。

しかしながら、日本の実習期間は諸外国のそれよりはるかに短いので、実習だけで理論と実践をつなぐことは困難な状況です。そこで学生の日常生活の中に、親や子どもの実際の姿を見たり、かかわったりすることができ環境を用意することが大切であると考えています。特に現在のように、実際の親子の姿を見ることがなくなった社会状況にあるので、保育者養成をする側が地域の親子を受け入れ、保育者になりたいと考えている学生に、親子を見たり、かかわったりする機会を提供することこそ必要だと

思います。保育所や幼稚園というような特定の親子が来る場所だけではなく、地域に住んでいる親子が誰でも、子どもの年齢に関係なく、訪れることができる場所を提供することは、学生にとっても、地域の親子にとっても、双方に意味のある場所となるはずです。

私が勤務している短期大学でも、保育学科の設立とともに地域の親子の遊び場を学内に開設しました。月曜日から金曜日までは午前十時から午後四時まで、土曜日は午後三時まで開いています。時間による子どもの年齢制限はありません。いつでも誰でも遊びにきたい親子に利用してほしいと思い、おもちゃや絵本などを用意し、保育士が常駐し、遊び場として開設しました。利用者が非常に多く、こんなにニーズがあったのかと驚いています。この場で学生たちが親子と出会い、子育ての実際を知る機会になっっていることはいまでもありません。学生の、

保育者への成長のために、親子が果たす役割は非常に大きいと思います。また親にとっても、自分の子どもを育てているだけではなく、学生のためにもなっているという自覚が、より親らしさの成長につながっているようにも思います。

さまざまな年齢の人々が集う場所を意識的につくることは、住んでいる地域だけでは難しいのですが、保育者養成をしている学校なら、比較的容易にできるのではないかと考えます。保育者を目指している学生にとっても、日常的に多くの親子の実際を知ることは、書籍やVTRから得られたものより、はるかに多くを学習できることにもつながっていきます。

このような場での学習を、課外活動にするのではなく、正規の教育課程の中に入れ込む工夫をするのが、保育者養成校の現在の課題だと考えます。

(東横学園女子短期大学)